



## 仲良くできますか？

三島次郎

道端に生えたエノコログサ、垣根に絡まるヒルガオやサルトリイバラ、クズやヤブガラシ、ごく身近な都会の野草たちと仲良くできますか？

街路樹のまわり、歩道の割れ目などに草が生えてくると、人々は何の躊躇もなく抜き去ってしまいます。でも、抜かれてしまった一本の草も、いわゆるヒートアイランド現象を防ぎ、二酸化炭素の吸収、酸素の供給などはたらきを持っています。見えない自然のはたらきに、目を向けることは、直接に目に見えないだけに困難なことかも知れませんが。

屋上の緑化、窓辺のグリーンカーテン、植物のはたらきに着目して身近に植物を育てる試みが行われています。でも、人が手伝わなくても、黙っていても、あるいは採っても採っても生えて



くる都会の野草たちのはたらきになぜ着目しないのでしょうか。生えてくれば雑草、植えれば貴重なグリーン。何かおかしいとは思いませんか。

塀や石垣の僅かな隙間から芽吹いたダイコンやキャベツ、あるいは花木など、「ど根性〇〇」として人々の話題になり、マスコミなどにも大きく取り上げられることがあります。でも、私たちの身の回り、いつもの道端をもういちど見て下さい。どの植物もみんな「ど根性グリーン」ではないでしょうか。

もちろん、「美しさ」という価値観、評価を否定するつもりはありませんが、ハキダメギクの小さな可愛い白い花、歩道の割れ目からそれこそ「ど根性」の見本のように生えてくるカタバミの黄色、美しいと評価できませんか。



「よく見れば ならずな花咲く 垣根かな」という芭蕉の句があります。いわゆるぺんぺん草の可憐な美しさを感じ取る俳聖の優しい心に見習いたいと思う昨今です。

### 三島次郎先生の野外勉強会のご案内

日時: 11月3日(土) 10:00~12:00

集合場所: 板橋美術館7F/1F工室

テーマ: 地球温暖化と身近な緑のはたらき

参加費: 500円

講師のプロフィール: 桜美林大学名誉教授。専門は、生態学、環境科学。

著書に「トマトはなぜ赤い—生態学入門」、 「生物誌からのエコロジー」、 「街角のエコロジー」などがある。

## トラップ(落とし穴)に落ちた虫を観察した

8月に入ってから8月の終わりまでほとんど毎日のように30℃以上の暑さでした。ところが観察会のあった8月18日は連日の猛暑がうそのように1日だけ涼しい日でした。

8月14日、暑い中を釣巻さんと瀬田さんがトラップ(落とし穴)をしかけ(17日に中間回収)、18日はトラップにかかった虫を回収して観察する会でした。釣巻さんが来年本格的な調査をするにあたっての下調査です。

トラップはペットボトルを加工したもので、土に埋め込みます。餌は、①サナギ粉、②カルピス、③何も入れない土だけ、の3種類。サナギ粉やカルピスの臭いに誘われてトラップに落ちる虫もいれば、通りがかりに餌の入っていない落とし穴に落ちた虫もいるわけです。餌が入ってい

ないトラップにも虫は結構いましたが、アオオサムシのように飛べない虫は残っていますが、飛べる虫は餌がないと出て行ってしまいます。

まずトラップを回収し、餌ごとにかかった虫を数えます。トラップをしかけた場所はバッタ広場2地点とバッタ広場傍の樹林地5地点で、それぞれ3種類のトラップ（餌2種類+土だけ）をつけました。トラップの数は合計24個。



左：トラップはペットボトルを切り、口を逆さにしたもの。これを土に埋め込むと虫の落とし穴になる。回収してトラップごとに入っている虫を調べる。

チョウやトンボと違って地面を這う虫は人目にもつかず姿も地味です。が、彼らは、私たちの知らないところでせっせとリサイクルに励む、大切な地球の仲間なのです。トラップにかかった虫をみると、そんなことも思います。

シテムシの仲間は自然界の掃除屋さんで、生き物の死体を食べ、そこに卵を産みます。オオヒラタシテムシとコクロシテムシの2種類がいました。

コガネムシ類の一部は糞を食べる昆虫(糞虫)です。センチコガネとエンマコガネがいました。緑色のきれいで大きなアオオサムシは樹林地に住む虫ですが、バッタ場にもいました。肉食性で、ミミズなどを食べます。



アオオサムシは3 cm程あって、やはり大きい

トラップをかけて3日目にもうハエが卵を生み、ウジがわいていました。そうするとウジを食べる虫（エンマムシ）もやってくるそうです。

8月17日に釣巻さんがかかった虫を回収したので、表は17日から18日までの1日にかかった虫です。

樹林地とバッタ広場の間で、雌のカブトムシを見つけました。甲羅の色もあせ、何かに噛まれたような傷があります。釣巻さんが、クワガタと争ってやられたんだ、と見てきたようなことを言います。まだ卵を産む元気もあるだろう、と樹林地に放してやりました。カブトムシも頑張っているんですね。



城址斜面の樹林にはカブトムシやクワガタがいるようです。笹藪に踏みつけられた道が出来ています。飲料缶などのゴミもいっぱい落ちていました。人が入ってトラップをかけたり、木の根元を掘ったりした跡があり、林床も荒れてきています。それだけ頻りに人が林内に立ち入っているということでしょう。公園管理所が「斜面保護のため立ち入り禁止」の看板を立てています。身近にカブトムシを見たり、捕まえたりできることはすばらしいことです。このカブトムシが住めるすばらしい森を大切にしていきたいですね。(坂本 郁子)

### トラップにかかった虫(8月17日~18日)

	バッタ広場(3地点)				斜面樹林(5地点)			
	餌なし	サナギ粉	カルピス	計	餌なし	サナギ粉	カルピス	計
アオオサムシ	1	1		2		2	1	3
オオヒラタシデムシ(成虫)	5	4	7	16	5	2	7	14
オオヒラタシデムシ(幼虫)	5	32	4	41	3		1	4
コクロシデムシ		3	1	4		1		1
センチコガネ			1	1	3	1	4	8
エンマコガネ(3種合計)		12	4	16	2	6	7	15
ハネカクシ類						1		1
ヒゲジロハサミムシ(幼虫)							1	1
マルガタゴミムシ?		1		1				
ツチカメムシ			1	1				
サビキコリ							2	2
ケシキスイ類							2	2
エンマムシの仲間							1	1
ウジ(ハエの幼虫)		多		多				
ダンゴムシ					1			1
オオムカデ							1	1
コオロギ(幼虫)							1	1
アオハナムグリ*				1				
ゴミムシの仲間			2	2				
カブトムシ*								1
コフキコガネ*								1

注) コアオハナムグリ、カブトムシ、コフキコガネはトラップに入った虫ではありません。アオオサムシ、シデムシ類、センチコガネなど直ぐに同定できる虫は全部その場で放しました。

## 上赤塚90番地

板橋区上赤塚90番地、これは私が終戦の1年前(1944年)から十数年間住んでいた所の住所で、現在の成増一丁目30番の一隅、今では月極駐車場になっています。もう少しわかりやすく案内すると、東京メトロ有楽町線「地下鉄成増」駅の1番出口から川越街道に出、左手の光が丘方向に向かう板橋区と練馬区の行政境通を光が丘方向に100mほど進んだ左側です。

私が住んでいた頃、この付近は通り沿いを除けばほとんどが畠か更地で、今思えば雨水浸透には絶好の場所、緑被率の申し分の無い場所だったことなど、消えかけている記憶をたよりに居住地近傍の様子を綴ってみます。

当時この辺りで舗装されていた道路は川越街道と、川越街道から成増駅への道だけ、しかも川越街道はアスファルト舗装ではなくコンクリート舗装で、駅への道はたしか敷石の道だったように記憶しています。道路は砂利が敷いてあれば良いほうで、ほとんどが泥道、前記の行政境通りには申し訳程度に砂利が敷いてありました。雨が降ればいたる所に水溜りができ、たまに通る車とのすれちがいは大変、また夏の降雨の少ない時期車のうしろにはものすごい土埃が立ち上がり、各家では埃がおさまるまで窓を一時的に閉めたほどでした。

こんな所でしたが、どういうわけかこの辺りには進駐軍相手のバーやクラブが多く(とくに朝鮮動乱に合わせて)、ラジオが浪花節の全盛期だった頃なのに、これらの店から流れる出る電気蓄音機の洋楽には大いに驚き、強烈な印象として残っています。今では懐かしの曲の部類になるのですが、「プリテンド」「テネシーワルツ」「ブルーカナリヤ」「グッドバイ」などなど。私が洋楽好きなのもこの頃の影響かと思っています。

この道路の板橋区側には行政が構築した側溝がありましたが、これがいわゆる土側溝(地表部を掘ったまま)で、雨水はもちろんのこと、家庭の排水さえこの側溝を流れていました。しかもここにオタマジャクシがいたのを覚えています。排水がそれほど汚れていなかったのか、あのオタマジャクシの生命力が特別に強かったのか、今でも考えられないような状況でした。ただその後、あることが原因でオタマジャクシは全滅してしまいました。土側溝の宅地側には土が崩れるのを防ぐためか、ほとんどの家で側溝に沿ってハナショウブが植えてあり、開花時は良き眺め、またカエルの良き棲家でもあったようです。降雨後などには土側溝が自然崩壊するので、各家では定期的に側溝の泥さらいをしていましたが、その際の泥はハナショウブの根元に積み上げていました。この泥の異臭について、誰も文句など言う人はいなかったように記憶していますが、これは住人が寛大だったのでもなく、嗅覚が鈍かったわけでもなく、この悪臭さえ生活の一部と思わざるを得ないほど生活に追われていたのが実情だったのでしょうか。

側溝構築時にはそれなりの勾配を確保していたのですが、その後の泥さらい時に人為的な勾配を気にするわけでもないのに、よく流れていたものだと思います。ただ実際にはかなり澱んでいたところもあったようで、それが証拠に側溝にはボウフラが生息していました。これが発疹チブスなどを媒介する蚊の撲滅を理由に、進駐軍によって大量に散布されたあの悪名高きDDTのおかげで、ボウフラと蚊が全滅したのは良かったのですが、同時にめずらしかったオタマジャクシ、カエルもいなくなりました。いずれは姿を消す運命にあったとは思うものの、たったひと夏の数回の薬剤散布で全滅しましたから、人間を疫病から守るためとはいうものの、この頃から既に人間による環境破壊が始まっていたことになるのでしょうか。

ここの流水は南から北に流れていて、流末は川越街道の側溝だったと思いますが、交差部付近に人孔があった記憶も無く、あの排水はどのように側溝に流れ込んでいたのか、いま思い起こすと不思議です。ただ交差部付近にいつも水溜りの所があったので、まったくの自然流下だったの

かもしれません。今では考えられないような環境下にあったことになります。

我が家の前の道路を南(光が丘方向)に200mほど行った西側(練馬区側)に、「<sup>とげつぎん</sup>兎月園」と言う名の樹林の豊富な広い一区画がありました。子供心にも不思議な所で、絶好の遊び場でしたが、長い間ここがどういう所なのか知りませんでした。

後述する保有資料<sup>1)</sup>より兎月園界隈のページの一部分を抜粋してみます。

『大正から昭和のはじめ、成増方向に向かう乗合自動車の路線に「兎月園前」という停留所があった。ここは東武鉄道の経営者根津嘉一郎氏が成増付近の発展のために考案したという高級遊園地で、広さは1万坪(3万3000m<sup>2</sup>)以上、園内には料亭のほか日本庭園、遊興施設、運動場、池などが完備、帝都郊外にふさわしい行楽地となった。』さらに『大正末期から昭和18年ご



板橋区教育委員会発行 「写真は語る 総集編」より

ろまでの短い期間ではあったが、成増付近の名所の一つであった。が、その実態は詳(つまび)らかでなかった。最近、「月刊光が丘」(1992年10月号)が“幻の兎月園を探る”特集をだされたが、地元に着しなかったこの施設、あまり人々の記憶にはのこらなかつたらしい。』

今ではここに中層の社宅が何棟か建っています。私が遊んでいた頃園内の池には湧き水があって、池からさらに光が丘方向に小さな水路がのびていました。現在この水路は暗渠となり遊歩道のようになっていますが、池や湧き水、暗渠に常時水流があるか否かは不明です。当時の園内は起伏に富み、所々に築山や東屋があり、高木も多くて夏でも涼しく、カブトムシ・セミなど虫取りの絶好の場所でした。私が遊んでいたのは昭和20年(1945年)前後だったので、資料によれば閉園された後だったこともあつてか出入りはまったく自由、木登りしようと、東屋で遊んでいようと怒られることもありませんでした。ただ何故か違和感のある所だと長い間不思議に思っ

ていましたが、それが前記の文章で、遊びの環境最優良地ではあったものの、実は子供が遊ぶような所ではなかったのだと知りようやく納得したしだいです。それにしても終戦直前でさえ、ここに軍刀をさげた軍属のような人の出入りが日常的にあったことは事実で、抜粋文にもあるとおり地元に密着しなかった施設というのも事実だったように思います。

兎月園の東側、現在の成増一丁目23～27番あたり、今では高層の集合住宅が何棟も建つ住宅地になってしまいましたが、当時は道路沿いの一部を除けば一面の畠で、ニンジン・コムギ・サツマイモと子供が主役、ここがまた遊びのホームグラウンドでした。追いかけてごっこ・トンボ取り・凧揚げ、とくに強風時に凧の尾を荒縄に変え、荒縄にニンジンの葉を何箇所かさしてつりあいを取り、凧がうまく揚がった時の醍醐味は今でも触感として残っています。その他諸々の遊びのすべてをここでやっていたので、道路に接した畠の一部はかなり荒らすことになり、都合の悪い時にお百姓さんが来たら一目散で逃げ帰ったりしました。畠が耕された後の強風時には土埃で視界がさえぎられるほどでしたが、それでもお百姓さんに文句を言っている人はいなかったように記憶しています。

前記の兎月園(樹林地)や、畠の地表部は関東ローム層におおわれており、しかもこの辺の地下水位は地下数メートルにあったと思われ(我が家の井戸水位が6～7m程だったので)、雨水浸透能力は十分に期待できる場所だったはずで、ところがここが住宅地が変わってしまったことで、結果として湧き水の減少や、最悪枯渇にもつながりかねません。また地表部における浸透量の減少で、降雨が最寄りの河川に直接流れ込むことになり、石神井川や白子川などの都市河川は、できるだけ短い時間に大量の水を流さなければならず、現在のような排水路的な形状にならざるを得ないのかなとも思います。

民有地がどのように使われようとそれは所有者の権利ですが、樹林地や田畑の減少に伴う雨水浸透量や緑被率の減少は、水循環のみならず生活環境にとっても大きな問題です。また樹木が原因となる日照や落葉の問題など、緑被には生活に密着した難しい問題もあります。さらに現在の税制の一部が、雨水浸透量や緑被率を低下させる一因にもなっているようにも思います。

雨水浸透や樹林地の問題は、民間団体や個人による解決は難しい場合があり、行政と一体となって対処することも必要だと思います。また、人間が生きてゆくための環境変化と、自然との調和をどう計るか、一朝一夕に解決できる問題ではありませんが、これを専門的に検討する部署が行政側にあっても良いように思います。

話がだいぶ横道にそれてしまいました。今でも時々あの辺りをブラブラ歩きますが、物陰から「〇〇ちゃん」が飛び出してきそうで、半世紀も経過しているのに懐かしさでイッパイになります。今では思いも及ばない土地柄に変貌してしまいましたが、私にとって上赤塚90番地近傍は想いでの地として忘れがたき一区画です。(田中 正安)

# 活動のお知らせ

- 運営委員会は毎月第1金曜日です。どなたでも参加できます。

10月運営委員会：10月5日(金) 18:30~20:30

11月運営委員会：11月2日(金) 18:30~20:30

場所：エコポリスセンター環境学習室

- 会報の印刷・発送は奇数月。お手伝いできる方はよろしく

日時：11月15日(木) 18:00~ 場所：エコポリスセンター

変更する場合もあるので、事務局にお問い合わせ下さい。

- 活動の問い合わせは瀬田まで (3969-7124)

会では赤塚城址周辺で、私たちが作ったビオトープを中心に自然の変化を観察したり、ゴミ拾いや、ビオトープの改善作業等を行っています。観察会は原則として雨天も実施します。

- 10月の活動 赤塚城址周辺観察会

日時：10月20日(土) 10:00~12:00

集合場所：赤塚トンボ池前(板橋美術館そば)

- 野外勉強会「地球温暖化と身近な緑のはたらき」

日時：11月3日(土) 10:00~12:00

集合場所：板橋美術館アトリエ室

講師：桜美林大学名誉教授 三島次郎

参加費：500円

- 11月の活動 赤塚城址周辺クリーン作戦

日時：11月17日(土) 10:00~12:00

集合場所：赤塚トンボ池前(板橋美術館そば)

- 生き物のすめる環境整備(いずれも赤塚トンボ池前集合)

9月22日 10:00~12:00

10月27日 10:00~12:00

バッタ広場のクズ抜き、トンボ池の管理

あなたも会員になってください(年会費2000円:振込先は表紙に記載)

いたばし水と緑の会の活動はすべて会員の会費によってまかなわれています。主な用途は、会報郵送料、印刷費、ビオトープ池維持管理のための資材費、コピー代などです。